

ランバス留学 研究成果報告

2023年 11月 1日

ランバス留学基金委員会 御中

所属：文学部
職名：教授
氏名：宇和川雄

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	ランバス留学 (滞在国：ドイツ)
研究課題	ヴァルター・ベンヤミンの思想研究
研究実施場所	ルートヴィヒ・マクシミリアン大学
研究期間	2022年 9月 5日 ～ 2023年 9月 4日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

1. ベンヤミンの歴史哲学についての研究

ドイツ到着後、2022年9月から2023年3月にかけての半年、集中的にベンヤミンの歴史哲学に関する研究をおこなった。第一に取り組んだのは、ベンヤミンが『ドイツ哀悼劇の根源』(1925)のなかで言及している「救済史」の理念の解明であり、第二に取り組んだのは『歴史哲学テーゼ』(1940)に記された「救済」と「幸福」の理念の解明である。両研究に取り組むにあたっては、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学図書館およびバイエルン州立図書館においてドイツ語文献の調査・収集をおこなった。この二つの研究成果は、2023年3月20日に刊行された著書『ベンヤミンの歴史哲学——ミクロロジーと普遍史』(人文書院)において、書き下ろし論文として収録された。それぞれのタイトルは以下の通りである。

(1) 第三章「寓意と歴史——ベンヤミンにおける「救済史」の理念」

(2) 終章「メシアニズムから救済史へ、そして普遍史へ」「幸福のなかに潜む救済を求めて——科学と神学のあいだで」

なお、本書『ベンヤミンの歴史哲学——ミクロロジーと普遍史』は、2016年に京都大学に提出した博士論文を基礎としたものであるが、今回の刊行にあたっては論文全体の構成と各章の記述内容(序章、第一章、第二章、第四章、第五章、第六章)を全面的に見直し、ドイツで収集した資料をもとに加筆修正をおこなった。

2. ベンヤミンの翻訳論についての研究

2023年4月以降は、ベンヤミンの翻訳論について集中的に研究をおこない、その成果を2023年6月16日から6月18日にかけてルートヴィヒ・マクシミリアン大学で開催された「翻訳」

を主題とする公開シンポジウム「翻訳の文化的プロセス (Kulturelle Übersetzungsprozesse. 8. Forum lit. wiss. Japanforschung)」においてドイツ語で発表した。講演のタイトルは「Poetik der Exophonie, Politik der Übersetzung - Yoko Tawada und Inuhiko Yomota lesen Walter Benjamin (日本語訳: エクソフォニーの詩学、翻訳の政治学——多和田葉子と四方田犬彦のベンヤミン読解)」。本講演では、20世紀の翻訳論の古典として評価されているベンヤミンの「翻訳者の使命」を取り上げて、それが現代日本において「エクソフォニーの詩学」および「翻訳の政治学」の着想源としてどのように読み直されているのかを論じた。本講演はシンポジウム初日の冒頭講演として2023年6月16日におこなわれ、25分の講演の後、10分間の質疑応答の時間が設けられ、聴講者とのあいだで有意義な意見交換をおこなうことができた。なお、本講演の内容は2024年度中に論文として公表予定である。

3. 近現代ドイツにおける「星の思想史」および近代プラネタリウムの発展史についての研究

2023年は近代プラネタリウムが1923年にドイツで誕生してからちょうど百年の節目の年にあたる。近代プラネタリウムとはそもそも、ミュンヘンの「ドイツ博物館」(1925年開業)の創設者オスカー・フォン・ミラーが、同博物館天文学部門の展示の目玉として考案した、夜空の星の動きを再現するための機械装置である。イエナに本拠地を置くカール・ツァイス社がさまざまな技術的問題を解決して、この装置の初号機が完成したのが1923年のことであり、この発明は「イエナの奇跡」と呼ばれ、当時のドイツでは大きな熱狂を呼び起こした。ベンヤミンもまた1928年の著書『一方通行路』のなかで「プラネタリウムへ」と題したエッセイを書いており、この近代プラネタリウムの誕生とそれに対する人々の熱狂におおいに関心を抱いていた。近代プラネタリウムについての文化史的研究はドイツではいくらかの蓄積はあるものの、まだひとつの大きなテーマとして認知されるにはいたっておらず、日本においてはプラネタリウムの文化史に関する入門書すら存在しないのが現状である。留学中には、1920年代にプラネタリウムが開館したドイツの各都市——ミュンヘン、イエナ、バルメン、デュッセルドルフ、ハノーファー、ベルリン、ライプツィヒ、ドレスデン、ニュルンベルク、ハンブルク、シュトゥットガルト、マンハイム——を訪れ、当地の大学図書館、公共図書館、書店等で現地でしか手に入らない資料を調査・収集した。その研究成果は、すでに郁文堂刊行の雑誌『Brunnen』において、「ドイツ・プラネタリウム紀行」と題した連載エッセイのかたちで公表されている。全十回の連載予定のうち、現時点では3回分が公表されている。ドイツ留学中に執筆したエッセイの題目は以下の通りである。

- (1) 「ドイツ・プラネタリウム紀行(1)——失われた星空を求めて」(『Brunnen』528号、郁文堂、2022年12月、8~12頁)
- (2) 「ドイツ・プラネタリウム紀行(2)——イエナ」(『Brunnen』529号、郁文堂2023年4月、6~9頁)
- (3) 「ドイツ・プラネタリウム紀行(3)ミュンヘン」(『Brunnen』531号、郁文堂、2023年10月、4~7頁)。

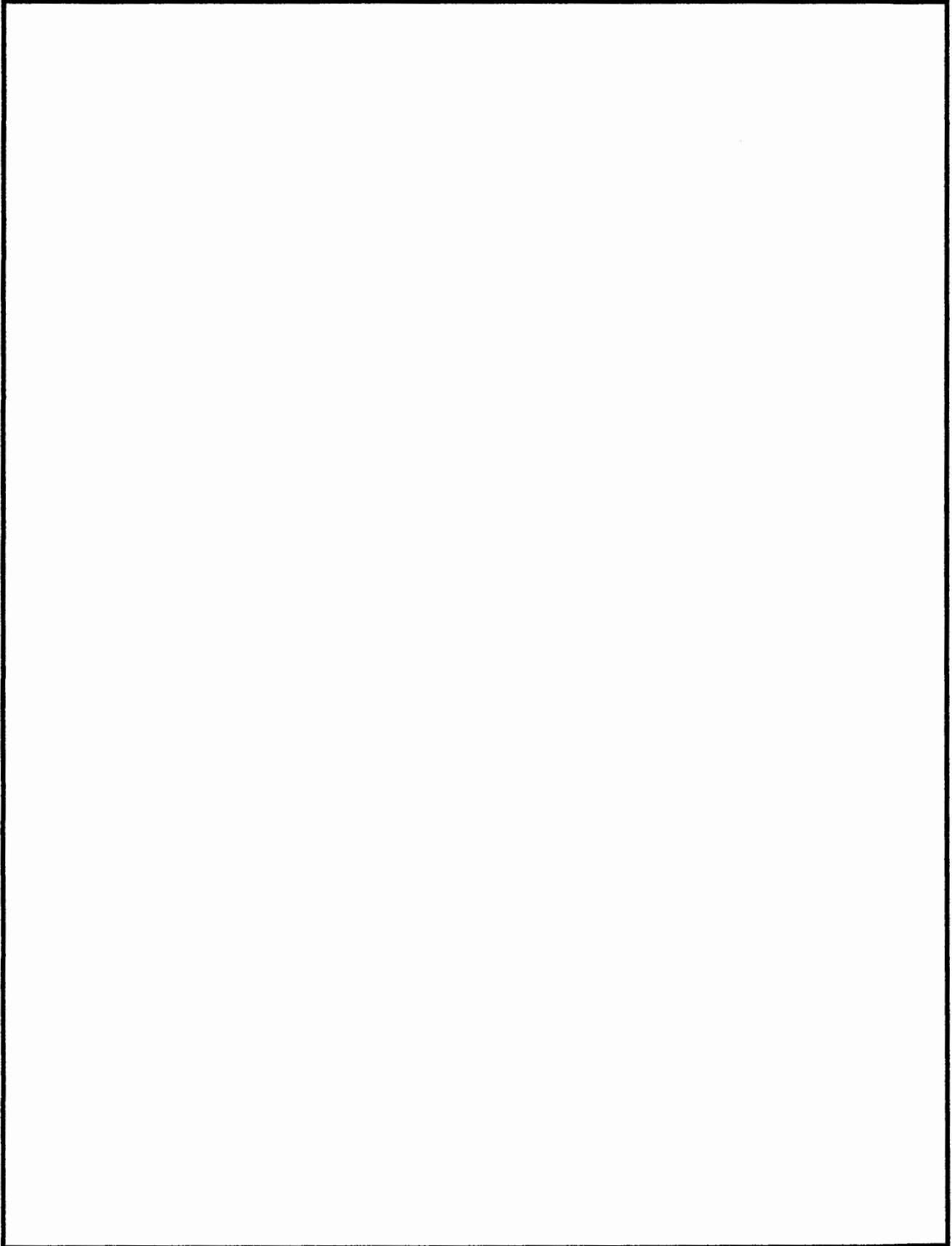
4. ルートヴィヒ・マクシミリアン大学の教員・研究員との交流、および各種研究会・研究会への参加

留学中はルートヴィヒ・マクシミリアン大学のエヴェリン・シュルツ教授(日本近代文学／ベンヤミン研究)および同教授の研究室所属の研究員とコンタクトを取り、ベンヤミンの思想ならびに日本と西洋における「近代化」に関する議論と情報交換を定期的におこなった。また、2023年1月以降はベンヤミンの思想や近現代ドイツ文学を主題としたさまざまな講演会・研究会に参加し、自身のベンヤミン研究を深める貴重な機会を得た。参加した講演会・研究会のうち、主要なものを以下に列挙する。

- (1) ドイツ現代文学に関する講演会: Jagdszenen aus Niederthann. Ein Lehrstück über Rassismus - Hans Woller & Radoslav Ganev im Gespräch. (2023年2月1日、於ミュンヘン文学館)

(2) ベンヤミン研究者の講演会 : LILIANE WEISSBERG: WALTER BENJAMIN SAMMELT
POSTKARTEN. (2023年3月13日、Zoom開催、主催 : Internationales Forschungszentrum
Kulturwissenschaften Kunstuniversität Linz in Wien)

(3) ベンヤミン研究者の研究会 : Lucía Pinto and Chunjie Zhang: Weber and Benjamin.
(2023年5月3日、Zoom開催、主催 : Weber Scholars Network)



以 上

提出期限：留学期間終了後2ヶ月以内

提出先：総務部 教育連携課

※大学教員は学長を、短期大学教員、初等部教員及び幼稚園教員は院長を、高中部教員は高中部長を、職員は人事部長を経て提出してください。

◆大学教員の研究成果報告は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は総務部教育連携課までご連絡ください。